

写真による高齢者の地域生活把握の試み —写真・ナラティブ誘出法 (PEN-A: Photo Eliciting Narrative Approach) による写真とナラティブの内容分析を中心として—¹⁾

石盛 真徳
追手門学院大学

岡本 卓也
信州大学

加藤 潤三
琉球大学

キーワード：地域生活、高齢者、写真-ナラティブ誘出法

Investigation on Community Life of the Elderly using the Photo Eliciting Narrative Approach

ISHIMORI Masanori
Otemon Gakuin University

OKAMOTO Takuya
Shinshu University

KATO Junzo
University of the Ryukyus

We developed a new interview and analytical approach for use in community research. The approach was named the Photo Eliciting Narrative Approach (PEN-A), which was based on the Photo Projective Method. PEN-A is a method for understanding a participants' perceived environment by using photographs. Elderly participants (N=14) were provided with digital cameras and were requested to take photographs related to their daily lives in their community for about a week. Subsequently, while watching the photographs on a monitor, we asked the participants why they had taken the particular photos. Content analysis of the data that consisted of the photographs and the narratives of elderly indicated that they actively used social support provided by their friends and spouses in their daily lives. Moreover, it was suggested that PEN-A could be a useful approaches for conducting community research aimed at clarifying the current living conditions of elderly people in detail.

Keywords : community life, the elderly, Photo Eliciting Narrative Approach

問 題

社会科学的研究における写真データの利用は増大と減少を繰り返してきたが、近年再び、かなりの程度の関心を集めるようになり、写真を利用した様々な研究法が開発されている (Hurworth, 2003)。それら写真を用いた研究法の開発は、言語による報告を中心とした質問紙調査や面接調査に存在する様々な限界や問題点を克服しようという問題意識を共通の出発点としている。本研究では、写真を利用した様々な研究法のうち、特に、調査参加者自らに写真を撮影してもらう形式で実施される参加型の写真調査法に焦点を当て、いくつかの代表的方法の特徴を検討した上で、筆者らの研究グループが新たに開発した写真・ナラティブ誘出法 (PEN-A: Photo Eliciting Narrative Approach) による地域生活把握の試みを紹介し、その有効性と問題点の検討を行う。

まず代表的な参加型写真調査法の一つである写真誘い出しインタビュー (photo elicitation interview) は、文化人類学においてインフォーマントへのインタビューで写真を利用したことを出発点とする研究法である (Harper, 1988; Heisley & Levy 1991)。当初の写真誘い出しインタビューでは、写真は研究者によって用意されたものであったが、参加者の研究への参加の度合いを高めるために、写真自体を調査参加者に撮影してもらう形式の調査法が考案され、基本的には調査参加者が日常生活の中で撮影した写真を手掛かりとして、彼らの世界についての経験や信念をより深く引き出すインタビュー研究が進められる (Clark-Ibañez, 2004)。写真誘い出しインタビューは、主に社会学分野において、様々な社会階層やコミュニティのエスノグラフィーを記述する研究に利用されている (Harper, 2002)。

次に、自叙写真法 (auto-photography) は、従来の心理尺度を用いたパーソナリティ研究を補完

する研究方法として開発されたものであり、「あなたは誰ですか」という問いに答える 20 答法 (Twenty Statements Test) の写真版といえる (Combs & Ziller, 1977; Ziller & Smith, 1977)。すなわち、そのデータ収集プロセスでは、調査参加者は「あなたは誰ですか」という問いに対する回答として、自分を表現する写真を自由に撮影することを求められるのである。そして、収集された自叙写真は、被写体や内容にもとづいてカテゴリー分類されるか、あるいは写真を張り付けた冊子全体を通覧して印象が評定され、分析が進められる (向山, 2004; Ziller, 1990)。開発当初、自叙写真法は、開発者である Ziller らの研究グループを中心として、自己を表現した写真の内容分析に基づいた非行少年と公立学校の学生との比較 (Ziller & Lewis, 1981) やシャイネスとの関連性の検討 (Ziller & Rorer, 1985) などが行なわれた。近年では、Dollinger らの研究グループが、例えば個性 (Dollinger, Robinson & Ross, 1999; Dollinger, Preston, O'Brien, et al., 1996)、宗教的アイデンティティ (Dollinger, 2001)、大学生の成績との関連性 (Dollinger, 1996)、撮影者の身体的魅力と社会との結びつき (social connectedness) の程度 (Dollinger, 2002)、飲酒行動 (Dollinger, Rhodes & Corcoran, 1993) などの自己に関連するより幅広いテーマを取り上げ、また参加者も大学生だけでなく、ストリートチルドレン (Monteiro & Dollinger, 1988) や中年期の男女 (Dollinger & Dollinger, 2003) にも拡大して研究を進めている。日本においては、向山 (2004, 2010) が自叙写真法を用いた自己概念研究を行なっている。

コミュニティのエンパワーメントも目的とした実践的研究法として、フォトボイス (photovoice) が開発されている。フォトボイスは、住民撮影の写真を通じてコミュニティの強さや関心事を記録し、それらの写真を基にした議論を通じて重要

な問題について批判的対話や知識を促進させ、さらには政策の策定者にもその結果を届けることを目的としたとした方法である (Wang & Burris, 1997)。フォトボイスは、学習困難という問題をかかえた母親の育児 (Booth & Booth, 2003)、地域での健康増進活動の活性化 (Wang, 1998) など社会的問題に関わる社会福祉や公衆衛生の分野でよく利用されている。心理学分野では、コミュニティ心理学の領域において、フォトボイスによるコミュニティの状態と人々のアイデンティティとの関連の検討 (Nowell, Berkowitz, Deacon et al., 2006) などの個別の研究が行なわれると同時に、参加者が写真撮影と近隣の人々との議論というフォトボイスに伴う経験によって、自分たちがコミュニティ変革のための主体となれることに気づくといった影響を受けることも示されている (Foster-Fishman, Nowell, Deacon et al., 2005)。ただし、フォトボイスによる研究はコミュニティにおける個別の取り組みとして実践されることが多く、その研究方法としての有効性は必ずしも明確にはされていない。しかしながら、実践事例の蓄積に伴い、その有効性を検討するレビューも行われ始め、健康・公衆衛生分野では参加の質がプロジェクト持続時間と行動への着手に関連していること (Hergenrath, Rhodes, and Cowan et al., 2009)、また適用される領域に関わらずコミュニティの変化を促進させること (Catalani & Minkler, 2010) などが示されている。日本ではまだフォトボイスの研究報告は少ないが、例えば、岡村・金城 (2002) が沖縄県離島における高齢者のニーズアセスメントとして応用している。

フォトボイスと同様に、コミュニティを基盤とした参加型写真調査の研究方法としては、近年急速に開発が進んだデジタルツールの活用を特徴とする参加型写真マッピング法 (PPM :participatory photo mapping) が挙げられる (Dennis, Gaulocher,

Carpiano et al., 2009)。PPM は場所の経験を探索し、その経験をコミュニティの利害関係者と地域意思決定者に伝えるためのツールであり、その研究手続きは、コミュニティにおける住民の巻き込みという点ではフォトボイスに、そして写真を手掛かりとしてインタビューを引き出すという点では写真誘い出しインタビューに準拠している。その独自性は参加者の写真撮影時に GPS ロガーによって記録された位置情報を地理情報システム (GIS:Geographic Information System) 上で総合的に管理・加工し、視覚的に把握しやすいマップとして表示することである。

他に、観光研究の分野では、観光地において調査参加者の撮影した写真データとその写真についての語りを分析する来訪者写真撮影法 (Visitor Employed Photography) という方法が開発され、景観研究として実践されている (Chenoweth, 1984; Cherem & Driver, 1983; 倉田・矢部・駒木ほか, 2010)。そして近年においても、来訪者写真撮影法を用いて、自然公園内を観光で訪れた調査参加者がどのような対象の感情経験 (Dorwart, Moore, & Leung, 2010)、そして自然公園に隣接する快適な環境の地域居住者が愛着を持つ地域内の対象 (Stedman, Beckley, Wallace et al., 2004) を感じているか等について、積極的な研究が展開されている。

その他の代表的研究方法としては、写真に撮影されたものを、自己と外界とのかかわりが反映されたものとみることによって、個人の心的世界を把握・理解しようとする方法である写真投影法が開発されている (野田, 1988)。写真投影法は、社会心理学分野の研究者により、アイデンティティ (林・岡本・藤原, 2008; 大石, 2010)、社会的ステレオタイプ (Okamoto, Fujihara, Kato et al., 2006)、場所への愛着 (岡本・林・藤原, 2009)、子育てにおける環境空間利用 (泊・辻阪・吉田,

2000)、そして高齢期の夫婦のパートナーシップ(植村, 1996)の把握・測定といった様々なトピックスに応用されている。社会心理学分野以外でも、写真投影法は、専門学校生の自己理解教育(田澤, 2010)や都市計画分野での団地再生計画(曾・延藤・森永, 2001)や景観内の河川の知覚(Yamashita, 2002)などにも応用されている。中でも、曾・延藤・森永(2001)は、単なる評価としての道具からまち育て活動の一手法に発展させる試みとして、インタビュー調査と写真発表会を加えた写真投影法を実施しており、その研究法はフォトボイスに類似したものとなっている。

これまでの参加型写真法の問題と PEN-A による解決策

参加型写真法は、参加者の調査への関与度を高めるためには非常に有効であることが、上述の様々な写真を利用した研究法において共通して報告されている(e.g. Harper, 1988; Wang & Burris, 1997; Ziller, 1990)。その一方で、写真を利用した研究法に共通する問題点は、写真という多義的なデータの解釈に際して、必ずしもその分析プロセスを明確化できていないという点にある。本研究で用いる PEN-A のルーツである野田(1988)の写真投影法でもこの問題点を抱えていた。すなわち、写真投影法は、質問紙法や面接法ではうかがいしれない精神生活の一端を浮かび上がらせる有効なデータ収集法である(野田, 1988)と同時に、写真を撮影した個人の属性と関連付けて写真を解釈する、あるいは限定的に付けられた撮影者のコメントを手掛かりに写真を考察するなど、写真の読み取り・解釈のプロセスに研究者側のバイアスが入る余地が多分にあった。

PEN-A は、その問題点を解決するために、データ収集と分析プロセスを明確化することを主眼として開発された方法である。PEN-A では、写真投

影法に面接調査を組み合わせることで、①投影的機能と概念化機能や②再評価機能と再発見機能といった写真投影法の持つ長所を生かしつつ、さらに③語りの客体化機能、④関係形成機能といった追加的な利点を実現している(岡本・石盛・加藤, 2010)。ただし、PEN-A はデータ収集方法や分析プロセスのそれぞれについて全く新たな独創的方法を提供するわけではない。というよりもむしろ、写真という多義的なデータの解釈に対する問題に対して、データ収集と分析手順を総合的にパッケージ化したアプローチ方法を提供する点に PEN-A のオリジナリティは存在する。PEN-A ではまず調査参加者自身に研究テーマに沿った写真の撮影を依頼する。そして、撮影期間の終了後に、それらの写真を調査者と調査参加者が一枚ずつともに見ながら、それらがどのような状況で何を対象にどのような意図をもって撮影されたのかを聞きとる面接調査を実施し、各写真に対応するナラティブデータを収集する。撮影枚数に関して、これまでの参加型写真法では、多くとも20枚程度に設定されることが多かった(e.g. Combs & Ziller, 1977; 植村, 1996)。この20枚程度という設定枚数については、自叙写真法の場合は20答法の写真版であるということを踏まえての制約であると説明がなされることもあったが、必ずしも明確な理論的根拠に基づくものではなく(向山, 2004)、実際には写真フィルムの枚数制限を反映したものであったといえる。しかしながら現在では、デジタルカメラのメモリ容量の増大により、実質的には撮影枚数の制限の必要性がなくなっているため、PEN-A では、撮影枚数の制限を設ける必要はないだろう。

次に PEN-A では、各抽象化レベルにある写真とナラティブデータ間の関連性について内容分析と統計解析を行う(図1)。具体的な分析手順として、PEN-A では、ステップ1として、1人当

たり数十枚から数百枚におよぶ撮影された写真とナラティブデータに対して、調査に関わった複数者がそれぞれ独立に重要度に基づいて選択を行う (図1の矢印①)。なお、この選択の際の基準となる重要度は、その写真の対象に対して、調査参加者が有意味なナラティブを行っているのかを基に判断される。そして、この複数名による独立した重要度の判断について一致度を算出することで、判定者の主観的バイアスがどの程度であるのが明確化される。また、それと並行して、ステップ2として、すべての写真について、調査に関わった複数の者がカテゴリー分類を実施する (図1の矢印②に対応)。一方のナラティブデータについては、ステップ3として、テキストマイニングによって、キーワードの抽出を行う (図1の矢印③)。そしてステップ1によって選択さ

れた写真とナラティブデータの対応関係を内容分析によって検討しつつ (図1の矢印④)、またカテゴリー分類された写真とテキストマイニングによって抽出されたナラティブ内のキーワードとの関係についてはコレスポネンス分析等を用いて、統計解析を行なう (図1の矢印⑤)。PEN-A はこれらのデータ処理ステップを着実に行うことにより質的分析 (図1の矢印④の内容分析)、量的分析 (図1の矢印⑤の統計解析) の両方を可能にする点に特徴があるといえる。そして、重要度に基づいて選択された写真・ナラティブデータとカテゴリー化およびテキストマイニングによって抽出された写真・ナラティブデータそれぞれの対応関係から、内容分析の妥当性・サンプル内の代表性についての検討も可能となる利点を持つ (図1の矢印⑥)。

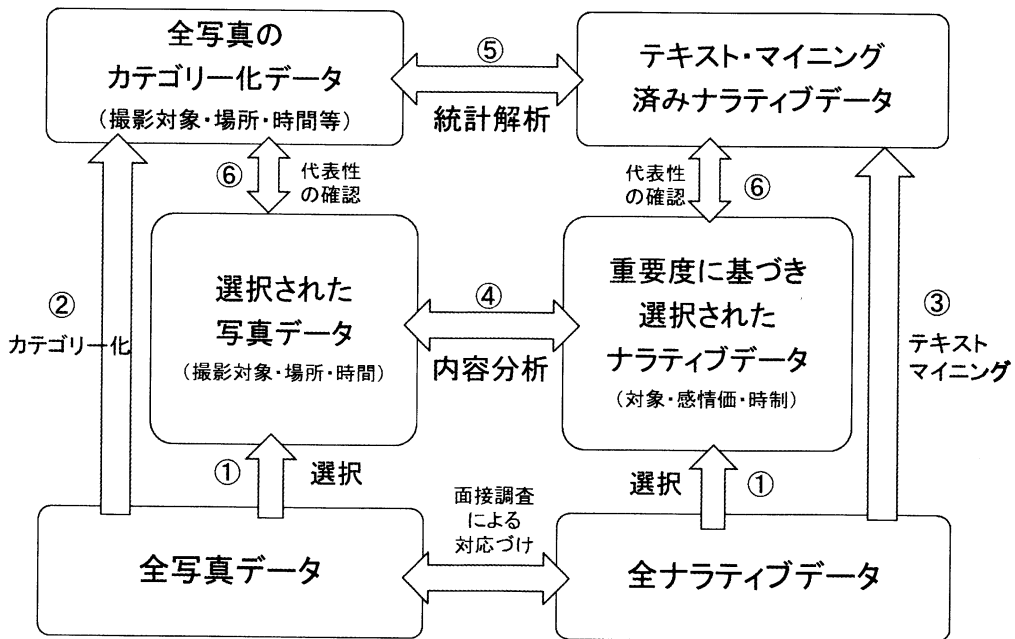


図1 PEN-A のデータ構造と分析手順

以上のように PEN-A は写真データとそれに付随したナラティブデータを包括的に分析するための研究アプローチであり、一つの論文内ですべての結果を報告することは困難である。そこで、本研究ではそれらのうち、重要度に基づき選択された写真とナラティブデータの内容分析(図1の④の内容分析)の結果に焦点を絞って中心的な考察の対象とする。本研究で、調査対象を高齢者の地域生活とするのは、高齢化社会において地域で高齢者ができるだけ自立した生活を送るための基礎データとして、高齢者本人の視点から地域生活を理解することが重要であるためである。さらには、参加型写真は参加者が子供や高齢者、あるいは障がい者等であり、通常の言語的報告が困難である場合には、その実施の簡便性からより実用的な方法とされるためである(e.g. 植村, 1996; Wang & Burris, 1997)。

方 法

調査参加者

京都市中京区の西ノ京・壬生地域に住む59歳から84歳までの男女14名(男性7名、女性7名)に対して、よりよい地域生活を築くための住民活動のための「生活実態調査」という名目で調査に協力してもらった。調査参加者は、京都市が展開する、地域レベルのまちづくり活動のための市民主体の活動拠点である「中京暮らしの工房館」の利用者に呼びかけ、参加の承諾が得られた人々であった。

調査対象地域の社会・歴史的特徴

京都市中京区の西ノ京・壬生地域は、歴史的には京都の近郊農村地域であったが、近代都市京都の市域拡大に伴って大正7年に京都市に編入され、都市化が進んだ(京都市情報館, 2010)。中京区は大宮通りを境界として、伝統的都心部の東

部と西ノ京・壬生地域を含む旧近郊農村地域の西部に区分される。そして、中京区西部の大部分は北野天満宮の氏子地域であり、毎年10月に行なわれる祭礼では、北野天満宮を出発した「ずいき御輿」が西ノ京の御旅所に迎えられる。近年では、JR山陰線二条駅の建替とJR山陰本線二条一花園間の高架化工事に伴う大規模な再開発工事の影響を受けた地域である。

調査時期

2009年10月から2010年1月にかけて調査参加者による写真撮影と撮影された写真についての面接調査を実施した。

調査の方法と手続き

まず、調査参加者に中京暮らしの工房館で調査説明会に参加してもらい、再度、調査の趣旨とデータ利用に関する説明を行い、調査への協力依頼を行った。その結果、調査参加者の候補者全員から承諾が得られた。次にデジタルカメラを渡し、カメラの操作方法を説明したのち、写真撮影について次の教示を行った。「お預けしたカメラで、10日間程度の間、日常生活での立ち寄り先や、お住まいの地域での好きな場所や思い出深い場所の写真を、お好きな枚数分、撮影してください。写真のうまい下手にこだわらず、カメラを携帯いただき、思いついた時に撮っていただければ結構です。撮影された写真は、もしうまく撮れていないと思われてもデータを消去されずそのままにしておいてください。」

約10日間の写真撮影期間を終えた後に、個人ごとに再度、中京暮らしの工房館に来てもらい、撮影された写真をパソコンに取り込んだ。そして1枚ずつパソコン画面に映し出された写真を共に見ながら、どこを撮影し、どういう場所なのかの確認と撮影理由(どういう意図や気持ちで撮影

したのか)、なぜ撮影したのかを尋ねた。面接者は第一著者と第二著者が半数ずつを分担した。なお面接調査においては、現在の普通の生活とこれまでの生活(職業、家族構成、居住年数等)についても質問を行った。面接調査結果については、調査参加者の許可を得て録音した。その録音内容を逐語録化し、写真に対応したナラティブデータとして分析に利用した。

結果と考察

表1は、調査参加者の性別ごとの平均年齢および、撮影枚数の記述統計である。性別による年齢差には有意差が認められず($U=22, n.s.$)、撮影枚数については男女間で有意差が認められた($U=3.5, p<.01$)。

PEN-Aの内容分析は、研究者に関わった複数の者が独立にナラティブを読み込み、撮影者自身にとって重要度が高いとして選択された写真を対象に実施されるが(図1)、本研究でも全写真1345枚に対応するナラティブを2名の判定者が独立して読み込み、それぞれが撮影者自身にとって重要な語りがナラティブにおいてなされているかを判定基準として写真の選択を行った。なお、その選択は研究テーマに厳密に沿うものに限る方針で行うケースと研究テーマに限らず撮

影者の人生や生活についての重要な語りがナラティブにおいてなされている場合にはすべて写真を採用する方針で行うケースがあり得る。たとえば本研究のテーマである高齢者の地域生活把握の場合、前者のより厳密な方針を採用すると、自宅内の所有物を撮影した写真に対応するナラティブが特に地域生活とは関係のない個人的な思い出話であるような場合にはその写真を採用しないことになる。もちろん、研究テーマによって内容分析の対象を絞り込むという点では、この厳密なアプローチの有効性も認められる。しかしながら、本研究では、この時点では高齢者の個人的な生活についても把握したうえで、地域生活のあり方を明らかにすることを目的として、後者のより幅広い選択方針を採用してそれぞれの判定者が重要度の判定を行った。

判定者2名の選択結果を集計した結果、2名とも採用111枚、判定者Aのみが採用34枚、判定者Bのみが採用41枚、そして両者とも不採用は1159枚であった。この判定結果について、カッパ係数を算出したところ、 $\kappa=.716$ であった。カッパ係数は.61以上であれば十分に一致度があると考えられているが(Landis & Koch, 1977)、今回の分析結果は、その数値を十分に上回っていた。また、カッパ係数に関して最も厳しいガイドライン

表1 性別ごとの年齢・撮影枚数

	年齢		撮影枚数	
	男性	女性	男性	女性
平均値	68.00	70.00	43.71	157.86
中央値	65	66	48	107
最小値	59	55	19	48
最大値	77	84	66	360
標準偏差	8.04	12.64	15.03	122.30

表2 男女別の各撮影場所での撮影枚数と比率

	自宅	飲食店	販売店	学校・教室	史跡	乗り物	路上	総計
男性	10 3.27%	5 1.63%	28 9.15%	21 6.86%	54 17.65%	6 1.96%	136 44.44%	306 100%
女性	170 15.38%	46 4.16%	151 13.67%	134 12.13%	102 9.23%	102 9.23%	215 19.46%	1105 100%
計	180 12.76%	51 3.61%	179 12.69%	155 10.99%	156 11.06%	108 7.65%	351 24.88%	1411 100%

▲は χ^2 検定の結果、有意に比率が高かった撮影場所、▽は χ^2 検定の結果、有意に比率が高かった撮影場所を示す。

を示している Gardner(1995)では、評定者間で一致していることを前提に分析を進めるには $\kappa > 0.7$ であることが必要とされているが、今回の結果はその基準も上回っていた。そして、最終的には判定者の一方のみが採用と判断した写真 75 枚については、2 者で協議を行いそのうち 64 枚を採択することを決定し、計 175 枚の写真とナラティブのセットが本研究の内容分析の対象として選択された。しかしながら、本研究においてはより幅広い重要度に基づく写真の選択方針を採用したことということもあり、全写真 1345 枚から 175 枚に内容分析の対象が絞り込まれたとはいえ、すべての写真の内容をここで詳しく検討することは不可能である。そこで、分析のポイントを探索するために、全写真データの撮影場所のカテゴリー分類を行い、男女別にクロス集計した(表 2)。クロス集計表に基づく χ^2 検定の結果、男性は女性よりも史跡や路上での撮影枚数が多く、女性は男性よりも、自宅、飲食店、販売店)、学校教室、あるいは乗り物といった場所での撮影枚数が多いという結果であった ($\chi^2(6)=132.16, p<.01$)。なお、以下の考察で取り上げる写真は、屋外で撮影されたもののうち、高齢者の地域生活の質を検討するうえで重要とされる地域資源の利用あるいは友人や配偶者から得ているサポート (e.g. 小

林・杉原・深谷ほか, 2005; 西村・石橋・山田ほか, 2000) に関してナラティブ内で言及があったものから選別した。

ここではまず男性と女性で違いがあり、氏子地域であることから調査参加者が日常的に訪問している北野天満宮にある史跡「お土居」に関連する写真について取り上げ、内容分析を行う。まず図 3 に調査参加者 O (男性・70 代後半) が撮影した「お土居」の説明板とナラティブを示した。

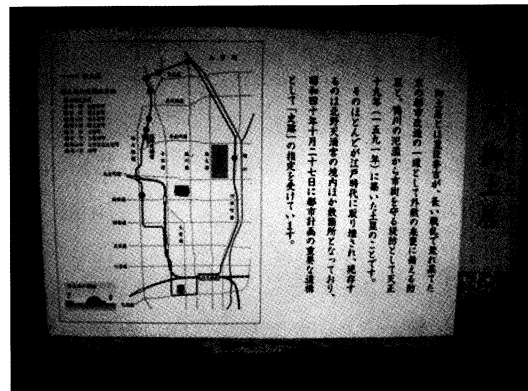


図3 調査参加者 O の撮影による北野天満宮境内の「御土居」に関する説明板

これは御土居。(ま、天満宮なんかはね、その、ポスターとかで、その、秋の紅葉もきれいだとか書いてますけど、何か、やっぱ、ウメのイメージ

が強すぎて、あれなんですけど、うーん。やっぱ、紅葉も結構?)きれいです。(ああ、そうですか。)私、きのう、やったかな、うん。行きましたけどね。あの、私らの氏子ですね、私のほうがね。ですから天神さんは、まあ、毎日私は、あの一、運動がてら行ってますけどね。(中略)ですから、その、これに関して、あの一、先生ご存じやと思うんですけど、はい。御土居のね、ことが、はい。なんぼでもしゃべれますしね。

*カッコ内は面接者の発言

次に図 3 と同様のお土居の説明板を調査参加者 G (女性・80 代前半) が撮影した図 4 とナラティブを以下に示した。

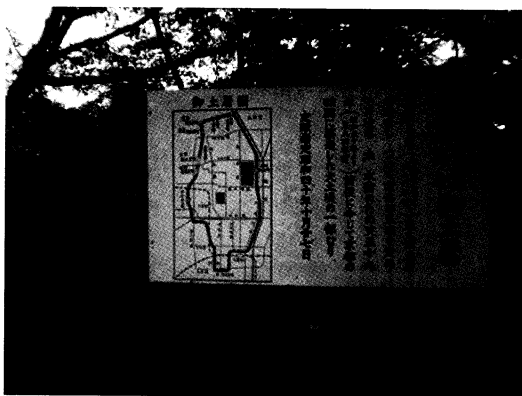


図 4 調査参加者 G の撮影による北野天満宮境内の「御土居」に関する説明板

北野の天神さんのところですよ。御土居とかいうところ。御土居とかいうところね。(はい。)豊臣秀吉の、どうたらこうたら、書いてありました。(ああ、でもちよっと紅葉が、なんか、ちよっとだけ紅葉、色づいてますね。)そうです。あ、これです。(あ、これ、さっきの御土居ですね。)うん。この周り、ぐるっと散歩ですね。もう、はい、見てきました。(すごくやっぱり、お元気ですよ?) いやそん

な。そんな、よれよれのふらふらですけど。(いや。これもやっぱり、じゃあ、お友達と一緒に。)はい。ええ。お友達に連れてもらいました。

*カッコ内は面接者の発言

男性と女性で史跡での撮影枚数にも違いがあるが、同じような写真を北野天満宮の境内という同じ場所で撮影していても、そこで語られる内容の方向性には大きな違いがあることが写真 1 と写真 2 のナラティブから明らかに示されている。調査参加者 O と調査参加者 G はともに日常的に北野天満宮に参詣しているが、そこにある史跡については、ボランティアで観光ガイドもしている調査参加者 G が「御土居のね、ことが、はい。なんぼでもしゃべれますしね。」と史跡としての興味をもって撮影し語っているのに対し、調査参加者 O は「御土居とかいうところね。」とそれほど関心を示さず、それよりも、「よれよれのふらふらですけど。」といいながら友人に連れてきてもらい散歩したというエピソードを中心に語っていた。これまでに高齢者研究を対象とした研究では、男性の方が女性よりも配偶者を社会的サポート源とする人が多く、配偶者の有無によりサポート源の種類が受ける影響が大きいことなどの性差が知られている(小林・杉原・深谷・ほか, 2005; 西村・石橋・山田ほか, 2000)。この 2 枚の写真の比較によって、高齢者における社会的サポートの受け方の男女差について何らかの結論を引き出すことはできないが、これまでの質問紙法による計量的調査で明らかになった知見と PEN-A によって明らかになった高齢者の地域での生活実態を合わせて論じていくことは重要であろう。

植村(1996)は写真投影法を用いて高齢期夫婦を対象に、高齢夫婦のパートナーシップの様態が彼らの日常生活にどのように表れているのかの

実態を探索的に検討した。具体的には、「大切なもの5枚」の被写体のなかに、配偶者が相互に撮影されていることを指標として分析した結果、パートナーシップなしの「夫」の場合、配偶者亡き後の孤立化が心配されることを指摘している(植村, 1996)。また実際に、独居男性は独居女性よりもより社会的に孤立している傾向にあることが示されている(小林・藤原・深谷ほか, 2011)。

そこで本研究でも、次に高齢者の夫婦間のサポートに注目し分析を行う。まず以下に、調査参加者 N (80代前半・男性) の撮影した図5とナラティブを示した。



図5 調査参加者 N の撮影による診療所

(こちらに行かれるときは、地下鉄で?) 地下鉄で行きます。東に。(で、行って、そこからは。そこからバスで。) ひと駅やけど。二駅か、乗って、東山二条まで行く。(行かれるときも、基本的にはお一人で?) いやいや、家内と。家内にはついて来てもらいますねや。こけたらいかんちゅうてますね。(はい、はい。) たいてい、もう、病院は、もう、ついてきます。ついてきてもらいますねん。(はい、はい。じゃあ、まあ一緒に、まあおでかけみたいな感じ?) そうです。そやからね、時間がとられるいうて、怒られます。(ああ、そうですか。奥さんは、全然お元気で?) ま

あ、まあ。足は悪い言うてますけどね。(奥さんは何歳でいらっしゃるんですか?) 5歳下です。(ああ、5歳下。結婚されてもう50年ぐらいいは?) そうですねん。(金婚式は?) 金婚式済んだ。(ああそうですね。ただ、そう言いながらも、一緒について来てくれるんですからね。) ああ、そうそう。ついて来てくれますのでね。喜んでますねや。

*カッコ内は面接者の発言

Nは地下鉄とバスを利用した通院に、「時間がとられるいうて、怒られます」としながらも付き添ってくれる妻に対して「喜んでますねや」と感謝を示している。

ただしもちろん高齢者夫婦間であっても必要性に応じて、夫がサポートの提供源となることが当然ある。次に、調査参加者 M (男性・70代後半) の撮影した図6とナラティブを示した。



図6 調査参加者 M の撮影による夫婦での散歩の様子

あっこれは、家内とね、家の近くなんですけど、はい。(筆者注:ぎっくり腰で) もうあんまり寝てばかりおるんもあれやし、うん。家内はポチポチしかよう歩きませんので。(はいはい。) ほな、いっぺん2人で散歩行こうか言うて、出てき

たところパッチと撮ったんです。ああ、途中でありますけど、ここの右側側にイチョウの木がね、イチョウの木が紅葉がきれいと言いたんがあるんですけど。(はいはい。)それのおんなじところらへんですわ。(もうこの頃にはまだ歩ける大丈夫だったんですか?) 私はちょっとね、どっちか行くと、その一、強行派ういか。逆療法つちゅーんか、あんまり痛い無理して歩けたんで、ガツと歩いてそれで治していくような感じなんで。(なるほど。実際そういえば、良くなっているんですよ。)ああ、もうだいぶ良くなりましたよ。だからこれは家内です。(よく奥様と一緒に散歩されて?) ああ、よく行きますよ。もう身体障害者なんでね、できたらついていかんと、もう大丈夫かなあ、大丈夫かな。家におって思うのかなわんし、それやったらいつそのことついていったほうがええわと思って。いつとも一緒に町内グリッと一回り、やっとなりよったんですわ。それまではもう、もう家を出たくもなかったんですわ。(いやー、仲がよろしいですね。) いや、そんなことないよ。(そんなことないですか。) よう、ケンカしますよ。(えっ、でもなんか2人で一緒にお散歩に出られるっていうのは。) もう十何年かな。手術しよってから、十何年かな。大手術しよりましたんでね。(はいはい。) そやから、まあまあ、自分の、もう自分のできるだけのことぐらいしかようしませんけど。うーん。できるだけことはしたらええね。

*カッコ内は面接者の発言

調査参加者 M は、妻との写真を見ながら「もう身体障害者なんでね、できたらついていかんと、もう大丈夫かなあ、大丈夫かな。家におって思うのかなわんし、それやったらいつそのことついていったほうがええわと思って」と自分でできる範囲のサポートをしていることを語っている。

PEN-A によって、高齢者の地域資源の利用についても、その生活実態に即した中で検討する必要がある。調査参加者 F (女性・80代前半) の撮影した写真とナラティブを以下に図7および図8として示す。



図7 調査参加者 F の撮影による
野菜販売の様子

野菜の曳き売り。うちの近く、毎週土曜日に1回、来るんです。まあ、おいしいさかいに、毎週こうやって買ってます。(ああ。やっぱり、お野菜、違いますか?) 違いますね、おいしいですね。そやから、まあ、値段は同じですけどね。(値段も特に高くなくておいしいんだったら、絶対いいですよ?) ほんで、もう親戚でも送るんですよ、これ。聖護院大根ですね。(あっ、カブラじゃなくて、聖護院大根ですね。)カブラはこれからで、まだ出てない。(ああ、まだ?) もうちょっと。(まあ、季節のほんとに野菜が食べられて。) そうですね。楽しみにしてるんですよ。

*カッコ内は面接者の発言

これ、北野。北野商店街。(そかも歩いていかれて?) もちろん、そうです。これ、とようけ茶屋。ねっ、知ってはりますか?(はい。) ここのおいしいさかい買います。ここも一緒についでに買います。

(これは、あの、天神さんの前の食べるとこじゃなくて、お豆腐屋さんのほう?)お豆腐屋さんの。(じゃあ、やっぱり、まあ、こう、散歩がてら、買い物が出てらっていう感じ?)いえ、もう、これめがけて行きます。(ああ、そうなんですか。)もう、今日はこれにしようと思って。(ああ、なるほど。)やっぱり、あの、こだわってるんです。(へえ。そのこだわりはやっぱり昔から?)そうですねえ結構、ええ。やっぱり、年いってると、口だけは、舌だけは衰えへんのですね。



図8 調査参加者Fの撮影による
北野天満宮近くの豆腐店

調査参加者Fは、軽トラックでの新鮮な野菜の販売を「楽しみにしてるんですよ」と語り、また歩いて30分程度かかる豆腐店に「これめがけて行きます」と説明しているように、日常的な買いを通して、地域資源を有効利用している様子が見えがえる。また、購入した野菜を親戚に送るなど

の交流にも役立っている。

本研究の結果から、高齢者が配偶者や友人から得ているサポートが友人の日常生活の中で重要な役割を果たしていることが、写真とナラティブの対応分析により、地域での高齢者の生活実態に即して具体的に把握可能であることが明らかとなった。今後は、すでいくつかの研究で実施されているように (e.g. Dennis, Gaulocher, Carpiano et al., 2009; Kawase, Kurata, and Yabe, 2012; 大森・羽生・山下, 2013)、PEN-AでもデジタルカメラのGPS機能を利用した写真データと地理情報システム(GIS:Geographic Information System)との対応づけ等を行うことが重要であろう(石盛, 2011)。それによってPEN-Aでも、うち容分析にとどまらないテキストマイニングを用いた統計解析的な対応分析を精緻化することが可能となる。また、一時点での調査ではなく追跡的な時系列調査を行い、これまでにコンボイモデル(Kahn & Antonucci, 1980)などで理論的に議論され、また斎藤(2008)などによって計量的に検討されてきた高齢者の社会的ネットワークの経年的変化との対応を調査することも課題として残されている。

引用文献

- Booth, T., & Booth, W. 2003 In the Frame: Photovoice and mothers with learning difficulties. *Disability & Society*, **18**, 431-442.
- Catalani, C. & Minkler, M. 2010 Photovoice: A review of the literature in health and public health. *Health Education & Behavior*, **37**, 424-451.
- Chenoweth, R. 1984 Visitor employed photography: A potential tool for landscape architecture. *Landscape Journal*, **3**, 136-143.
- Cherem, G., & Driver, B. 1983 Visitor employed photography: A technique to measure common perceptions of natural environments. *Journal of*

- Leisure Research*, **15**, 65-83.
- Clark-Ibañez, M. 2004 Framing the social world with Photo-elicitation interviews. *American Behavioral Scientist*, **47**, 1507-1527.
- Combs, J., & Ziller, R. 1977 Photographic self-concepts of counselees. *Journal of Counseling Psychology*, **24**, 452-455.
- Dennis, S. F., Gaulocher, S., Carpiano, R. M., & Brown, D. 2009 Participatory photo mapping (PPM): Exploring an integrated method for health and place research with young people. *Health & Place*, **15**, 466-473.
- Dollinger, S. J. 1996 Autophotographic identities of young adults: With special reference to alcohol, athletics, achievement, religion, and work. *Journal of Personality Assessment*, **67**, 384-398.
- Dollinger, S. J. 2001 Religious identity: An autophotographic study. *International Journal for the Psychology of Religion*, **11**, 71-92.
- Dollinger, S. J. 2002 Physical attractiveness, social connectedness, and individuality: an autophotographic study. *The Journal of Social Psychology*, **142**, 25-32.
- Dollinger, S. J., & Dollinger, S. M. C. 2003 Individuality in young and middle adulthood: An Autophotographic Study. *Journal of Adult Development*, **10**, 227-236.
- Dollinger, S. J., Preston, L. A., O'Brien, S. P., & DiLalla, D. L. 1996 Individuality and relatedness of self: An auto photographic study. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 1268-1278.
- Dollinger, S. J., Robinson, N. M., & Ross, V. J. 1999 Photographic individuality, Breadth of perspective, and creativity. *Journal of Personality*, **67**, 623-644.
- Dollinger, S.J., Rhodes, K. A. & Corcoran, K. J. 1993 Photographically portrayed identities, alcohol expectancies, and excessive drinking. *Journal of Personality Assessment*, **60**, 522-532.
- Dorwart, C. E., Moore, R. L., & Leung, Y. 2010 Visitors' perceptions of a trail environment and effects on experiences: A model for nature-based recreation experiences. *Leisure Sciences*, **32**, 33-55.
- Foster-Fishman, P., Nowell, B., Deacon, Z., Nievar, M. A., & McCann, P. 2005 Using methods that matter: The impact of reflection, dialogue, and voice. *American Journal of Community Psychology*, **36**, 275-91.
- Gardner, W. 1995 On the reliability of sequential data: measurement, meaning, and correction. In John M. Gottman (ed.) . *The analysis of change*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Harper, D. 1988 Visual sociology: Expanding sociological vision. *The American Sociologist*, **19**, 54-70
- Harper, D. 2002 Talking about pictures: A case for photo elicitation. *Visual Studies*, **17**, 13-26.
- 林幸史・岡本卓也・藤原武弘 2008 写真投影法による場所への愛着の測定 関西学院大学社会学部紀要, **106**, 15-26.
- Heisley, D. D., & Levy, S. J. 1991 Autodriving: A photo elicitation technique. *Journal of Consumer Research*, **18**, 257-272.
- Hergenrather, K., Rhodes, S. D., Cowan, C. A. & Bardhoshi, G. 2009 *American Journal of Health Behavior*, **33**, 686-698.
- Hurworth, R 2003 Photo-interviewing. *Social Research Update*, **40**, University of Surrey, Guildford, UK.

- 石盛真徳 2011 GPS ロガーを用いた写真投影法による景観研究法の開発—写真投影法から Photo Eliciting Narrative Approach (PEN-A) への展開—平成 22 年度京都光華女子大学情報教育センター課題報告書。
<http://www.koka.ac.jp/ecis/nenpo10/10web/ishimori.pdf> (2014 年 2 月 26 日)
- Kahn, R. L., & Antonucci, T. C. 1980 Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. *Life-Span Development and Behavior*, 3, 253-286.
- Kawase, J., Kurata, Y., and Yabe, N. 2012 When and where tourists are viewing. Exhibitions: Toward sophistication of GPS-Assisted Tourist Activity Surveys. *ENTER 2012 (Information and Communication Technologies in Tourism 2012)*, 415-425.
- 小林江里香・藤原佳典・深谷太郎・西真理子・斎藤雅茂・新開省二 2011 孤立高齢者におけるソーシャルサポートの利用可能性と心理的健康：同居者の有無と性別による差異 日本公衆衛生雑誌, 58, 446-456.
- 小林江里香・杉原陽子・深谷太郎・秋山弘子・Liang, J. 2005 配偶者の有無と子供との距離が高齢者の友人・近隣ネットワークの構造・機能に及ぼす効果老年社会科学, 26, 438-450.
- 倉田陽平・矢部直人・駒木伸比古・有馬貴之・杉本興運 2010 何を、いつ、どれくらい見て、どこに興味を示すのか？—訪日外国人観光客のより詳細な行動調査に向けて—観光情報学会第 2 回研究発表会講演論文集, 43-48.
- 京都市情報館 2010 語りつがれるわがまち。
<http://www.city.kyoto.lg.jp/nakagyo/page/0000038847.html> (2014 年 2 月 26 日)
- Landis, J. R. & Koch, G. G. 1977 The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics*, 33, 159-174.
- Monteiro, J. M. & Dollinger, S. J. 1988 An autophotographic study of poverty, collective orientation, and identity among street children. *The Journal of Social Psychology*, 138, 403-406.
- 向山泰代 2004 自叙写真による自己概念研究 応用心理学研究, 30, 10-23.
- 向山泰代 2010 自叙写真法による自己認知の測定に関する研究 ナカニシヤ出版.
- 西村昌記・石橋智昭・山田ゆかり・古谷野直 2000 高齢期における親しい関係—「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者選択 老年社会科学, 22, 367-374.
- 野田正彰 1988 漂白されるこどもたち 情報センター出版局
- Nowell, B. L., Berkowitz, S. L., Deacon, Z., & Foster-Fishman, P. 2006 Revealing the cues within community places: Stories of identity, history, and possibility. *American Journal of Community Psychology*, 37, 29-46.
- 大石千歳 2010 アイデンティティの表現方法としての写真投影法 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 45, 131-141.
- Okamoto, T., Fujihara, T., Kato, J., Kosugi, K., Nakazato, N., Hayashi, Y., Ikeuchi, H., Nakagawa, N., Mori, K., & Nonami, N. 2006 Measuring social stereotypes with Photo Projective Method. *Social Behavior and Personality: an international journal*, 34, 319-332.
- 岡本卓也・林幸史・藤原武弘 2009 写真投影法による所属大学の社会的アイデンティティの測定、行動計量学, 36, 1-14.

- 岡本卓也・石盛真徳・加藤潤三 2010 面接調査の技法としての写真投影法 関西学院大学先端社会研究所紀要, 2, 59-69.
- 岡村純・金城芳秀 2002 沖縄離島における Photovoice の試み－参加型 Needs Assessment としての試み 沖縄県看護大学紀要, 3, 101-106.
- 大森宏・羽生和紀・山下雅子 2013 SLoT マップ：スナップショット・位置・テキストによる印象の集合知と街歩きマップ 日本建築学会計画系論文集, 78(683), 159-166.
- 斎藤雅茂 2008 高齢者の社会的ネットワークの経年変化－6年間のパネルデータを用いた潜在成長曲線モデルより－ 老年社会科学, 29, 516-525.
- Stedman, R., Beckley, T., & Wallace, S. & Ambard, M. 2004 A picture and 1000 words: Using resident-employed photography to understand attachment to high amenity places. *Journal of Leisure Research*, 36, 580-606.
- 田澤実 2010 写真投影法を用いた自己理解研究の試み－最終学年の福祉系専門学校生を対象にして－ 法政大学情報メディア教育研究センター研究報告, 23, 119-126.
- 泊真児・辻阪光平・吉田富二雄 2000 写真投影法による子育て環境の把握－プライベート空間 7機能の視点からの検討－ 日本社会心理学会第 41 回大会発表論文集, 140-141.
- 曾英敏・延藤安弘・森永良丙 2001 サステイナブル・コミュニティの視点からみた高齢者のための団地再生計画の研究－写真投影法による高根台団地の考察 日本建築学会計画系論文集, 549, 95-102.
- 植村勝彦 1996 高齢期の夫婦のパートナーシップに関する社会心理学的研究－「写真投影法」による分析－平成 6 年度ジェロントロジー研究報告 Number 2, 179-186. 財団法人 火災福祉財団.
- Wang, C. 1998 Photovoice as a participatory health promotion strategy. *Health Promotion International*, 13, 75-86.
- Wang, C., & Burris, M. 1997 Photovoice: Concept, methodology, and use for participatory needs assessment. *Health Education Behavior*, 24, 369-387.
- Yamashita, S. 2002 Perception and evaluation of water in landscape: use of photo-projective method to compare child and adult residents' perceptions of a Japanese river environment. *Landscape and Urban Planning*, 62, 3-17.
- Ziller, R. C. 1990 *Photographing the self: Methods for observing personal orientations*. Thousand Oaks, CA, : Sage Publications.
- Ziller, R. C., & Lewis, D. 1981 Orientations: Self, Social, and Environmental Percepts through Auto-Photography. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 7, 338-343.
- Ziller, R C, & Rorer, B. 1985 Shyness-environment interaction: a view from the shy side through auto-photography. *Journal of personality*, 53, 626-39.
- Ziller, R. C. & Smith, D. E. 1977 A phenomenological utilization of photographs. *Journal of Phenomenological Psychology*, 7, 172-182.
- 1) 本研究の一部は科研費若手 B（代表者：岡本卓也、課題番号 21730504）の助成を、また一部は先端社会研究所 2009 年度共同研究「他者問題に関する萌芽的研究プロジェクト」の助成を受けた。本研究における調査の

実施に際しては、中京暮らしの工房館の木村
壽夫館長（当時）はじめスタッフの方々にご

協力いただきました。ここに記して感謝いた
します。

著者連絡先：石盛 真徳

〒567-8502 大阪府茨木市西安威 2-1-15

追手門学院大学経営学部

Tel/Fax : 072-641-9582

E-Mail : m-ishimori@haruka.otemon.ac.jp